「エリアス・カネッティ『猶予された者たち』における生と死」に向けて

樋口　恵　　ドイツ文学専門　博士前期課程 2 年

1．はじめに

エリアス・カネッティ（Elias Canetti）は，スペイン系ユダヤ人の家庭に生まれ，二つの世界大戦を擁する激動の時代を生きた作家である。ナチス政権下での経験は，彼の文化哲学的大著『群衆と権力（Masse und Macht）』に結実した。この書において，カネッティはファシズムの本質を暴くことに挑戦している。『群衆と権力』の執筆期間（1948年～1959年），この執筆に専念するために，カネッティは小説や戯曲など一切の文学的作品に従事することを禁じる[1)]。それにもかかわらず，自らその禁を破り，1953年に戯曲『猶予された者たち（Die Befristeten）』を書きあげている。修士論文では，『猶予された者たち』と『群衆と権力』の思想的連関を視野に入れつつ，『群衆と権力』で扱われなかった「生と死」の問題が新たなテーマとして『猶予された者たち』に加わったと考えて，この作品を考察する。

本調査は，修士論文「エリアス・カネッティ『猶予された者たち』における生と死」の執筆に際する研究の一環として，『猶予された者たち』の作品理解を深めるために行われた。調査は，ドイツのコブレンツにある KAG. ヴェスターブルク劇場での『猶予された者たち』観劇と，この劇を演出したベーベル・ヴィエナ＝ガルン（Bärbel Vienna-Garn）監督への聞き取り調査，およびスイスのチューリッヒ中央図書館における文献調査である。

2．調査日程と調査方法

2011年 9 月11日

KAG. ヴェスターブルク劇場にて『猶予された者たち』観劇。

ベーベル・ヴィエナ＝ガルン監督への聞き取り調査。

2011年 9 月12日～ 9 月17日

チューリッヒ中央図書館にて文献調査。

チューリッヒ中央図書館

チューリッヒ中央駅

カネッティの墓

3．調査目的

『猶予された者たち』は極端にト書きの少ない戯曲であり，情景描写や登場人物の心理描写に乏しい。これは，作品解釈を困難にしている要因の一つである。『猶予された者たち』の初演は1967年であり，その後も幾度か公演された。報告者は，テクストの読解だけでは得られない新たな視座をパフォーマンスによって獲得するため，この作品を観劇したいとかねてから考えていたが，DVDなど映像化されたものを見つけることができなかった。今年2011年はカネッティのノーベル文学賞受賞30周年にあたるため，記念公演と称し各地でカネッティの戯曲が公演されている。この機会に『猶予された者たち』を観劇し，作品理解の一助としたいと考え，2011年9月11日KAG. ヴェスターブルク劇場で上演された『猶予された者たち』の観劇を行うことを計画した。また，ヴィエナ＝ガルン監督に演出に際する留意点をお伺いし，彼女が抱く作品の世界観を知りたいと考え，聞き取り調査を行った。

カネッティの遺稿は，全てチューリッヒ中央図書館が管理している。一部には2024年まで公開されない手紙や日記の類が存在するが，その他の遺稿はすでに閲覧可能となっている。これらの遺稿は未刊行であり，チューリッヒ中央図書館でしか閲覧することができない。今回の調査では，1940年代に書かれた死に関する二つの断想集,「死の本（Totenbuch）」（1942年）と「死に抗する断想（Aufzeichnungen gegen den Tod）」（1942年～1948年）を閲覧し，カネッティが『群衆と権力』および『猶予された者たち』の執筆に至る思索の変遷を，死をというテーマにそって辿ることを試みた。また,『猶予された者たち』の五つの草稿（1951年3月29日から10月8日に書かれた最初の草稿，1951年10月30日から1952年1月28日に書かれた二番目の草稿，1951年11月22日から1952年3月30日に書かれた四番目の草稿，1953年2月に書かれた五番目の草稿）を閲覧し，作品の成立過程を検証し，作品理解を深めることを目的とした。

4．調査結果

4.1. 観劇と聞き取り調査

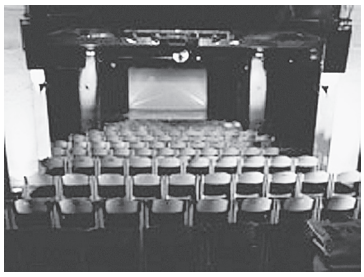
2011年9月11日にKAG. ヴェスターブルク劇場で上演された「猶予された者たち」は，ヴィエナ＝ガルン監督の演出により，一部原作とは異なるストーリーとなっていた。観劇に際し，報告者が気付いた原作と劇の相違点の中から，特に重要だと思われる二点を挙げたい。その前に，原作と劇の違いを説明するため，原作のあらすじを簡潔に述べることとする。

『猶予された者たち』の世界では，誰もが自分の死ぬ「瞬間（Augenblick）」を知っている。人は生まれるとすぐにカプセルを首に掛けられるが，カプセルの中にはその人の正確な生年月日と没年が記された紙が入っている。人が死亡した際,「カプセラン（Kapselan）」がカプセルを開け，その人の「瞬間」が記載通りだったかを確かめる。自分のものであれ，他人のものであれ，カプセルを開封する行為は国家によって禁じられている。人々は，自分が生きる年数で呼ばれており，それが彼らの名前となっている。この「瞬間」の制度によって，人々は自分の寿命を知るので，自分に残された時間を計画的に使うことができる。また，いつ自分が死ぬのか分からないという不安から解放される，ということになっている。主人公「五〇」は，「瞬間」が本当に存在するのか疑問を抱き，「瞬間」の有無を確かめるため，カプセランと対峙する。カプセルの中身が空だと知った五〇は，「瞬間」の虚偽を暴く革命を起こし，人々は，「瞬間」の制度から解放される。以上が作品の概要である。

ここで『猶予された者たち』の原作と劇との二つの相違点を挙げたい。一点目は主人公「五〇」の革命後の「二人の同僚」という場面にある。革命後，人々は「瞬間」の制度は偽りで，カプセルは空であることを知る。しかし，長い寿命を保証されていた者たちの中には，カプセルが空だとにわかに信じられない者もいる。「瞬間」が存在しなければ，自分が早死にするかもしれないからである。「同僚二」もそんな人物の一人である。カプセルは空なのだからもう捨てろ，という「同僚一」の要求を，「同僚二」は頑なに拒む。ここまで，原作と劇に相違はない。しかし，その後，原作では「同僚一」に脅迫されて「同僚二」がカプセルを踏みつぶしつつ，恐怖に震えながら死んでしまうのに対して，劇では「同僚一」が脅迫の際，勢い余って首を絞め，「同僚二」を殺してしまう。原作では「同僚二」の死に人為的要素は感じられず，その死因は不可思議なものに留まっていた。しかし，ヴィエナ＝ガルン監督は「同僚二」の死を殺人によるものとし，この場面に暴力の要素を加えている。

パウル・フレミング（Paul Fleming）は，革命前の『猶予された者たち』の社会には暴力の可能性がないと指摘している。誰もが定められた「瞬間」に死ぬため，誰かを殺そうとして暴力をふるっても，人が「瞬

劇場の外観



劇場の内部

劇『猶予された者たち』より

間」の前に死ぬことがないからである。フレミングは，革命後に暴力が復活したとし，「同僚二」の死を最初の暴力・殺人と捉えている[2)]。ヴィエナ＝ガルン監督による演出では，このような暴力の側面がより際立っているのである。

原作と劇の二点目の相違は，この物語を締めくくる，主人公「五〇」と「友人」の会話から成る最後の場面である。原作では，革命後，「五〇」が「友人」に再会する。「友人」は，三〇年前に亡くしたはずの彼の妹「一二」を探しているのだと「五〇」に告げる。「五〇」はそんな「友人」を止めようと説得を試みるが，「友人」は「五〇」の言葉に耳を貸さない。この戯曲は「五〇」と「友人」の仲違いによって終わる。一方，ヴィエナ＝ガルン監督による劇では，この場面は丸々カットされていた。劇は「五〇」と「友人」が登場する前の場面，「五〇」と「カプセラン」が対話する場面で終わっていた。さらにこの場面を一部改編し，「何も始めるんじゃなかった。(Ich hätte nichts beginnen dürfen.[3)])」という「五〇」の革命に対する後悔の言葉で幕が引かれるよう，構成されていた。この場面の改編について，終演後，監督にお話を伺ったところ，革命によってもたらされた，人々の生への力強い意思を表現するために，先述の様な場面で劇を終わらせることにしたのだと答えてくださった。そうすることによって，幕引きの「五〇」の言葉，「何も始めるんじゃなかった」が，反語的効果を発揮し，革命の必然性が印象付けられるからだ。原作では最後の場面において革命の意義が曖昧なものとなり，だからこそこの作品世界が深遠なものとなるのだが，確かに劇の幕引きとしては相応しくないかもしれない。見る者を生への力で満たすようなこの幕引きは，ヴィエナ＝ガルン監督の演出の妙だと感じた。

4.2. 文献調査

チューリッヒ中央図書館での文献調査は，①1940年代に書かれた死に関する二つの断想集と，②『猶予された者たち』の五つの草稿を中心に行った。

①二つの死に関する断想について

1942年に書かれた「死の本（Totenbuch）」おいては，ドイツ語で書かれた断想に加えて，英語で書かれた断想が数多く存在した。カネッティは1938年，ウィーンで「水晶の夜」を経験した直後にロンドンに亡命している。ロンドンでの生活で英語を日常的に使うようになったため，英語の断想が増えたのだろう。報告者はカネッティが著作活動を全てドイツ語で行っていたと考えていたので，英語の断想が数多く存在したことに驚いたとともに，ロンドン亡命がカネッティに与えた言語上の影響の一端を見た思いがした。

「死の本（Totenbuch）」と「死に抗する断想（Aufzeichnungen gegen den Tod）」のうち，40年代前半に書かれた断想には，戦時中のためか，戦争に関する記述が多くみられた。しかしそれ以外にも「アリと死（Ameisen und Tod）」といった断想や，ドイツとイギリスにおけるエイズによる死者の推移をメモしたものなど，彼の死に関する断想は実に多岐に亘る。カネッティが死に関して広範な興味を持っていることが分かった。

②『猶予された者たち』の五つの草稿について

『猶予された者たち』の草稿は全部で五つ残されている。「猶予された者たち（Die Befristeten）」と題された，1951年3月29日から10月8日に書かれた初稿を閲覧して気になったことは，「四三」という女性が「四六」という男性に愛を告白する「求愛（Die Werbung）」という場面が冒頭で描かれていることである。報告者は，この場面を『猶予された者たち』において，非常に重要な場面だと考えている。『群衆と権力』の中で権力の起源として論じられている「生き残ること」にともなう満足の感情は[4]，『猶予された者たち』においても重要な役割を担っているのだが，先に挙げた「四三」と「四六」の場面では，この「生き残ること」にともなう感情を克服しようとする試みが見られるからである。『猶予された者たち』の社会では，名前の数字が大きい者ほど「上流」とされ，ステータスが高いため，多くの女性が「上流」の男性に憧れる。それに対して四三は「中流」の「四六」に好意を抱く。男性にステータスを求めるのではなく，「生き残ること」を相互に防ぐことを求めているからだ。四三と四六は同世代であり，名前の数字も近い。したがって二人の死期も近いということになる。彼らが一緒にいれば，お互いを生きのびるということがない。四三は「共通の瞬間」をパートナーに求めることで，生き残るという権力の感情を克服しようと試みているのである[5]。「四三」と「四六」のこの場面が冒頭で描かれたという事実から，カネッティが『猶予された者たち』の構想の最初期からこの場面を念頭に置き，重要視していたことが伺える。カネッティは「生き残ること」を防ぐ試みを，この作品において提示したかったのではないかと推察される。

1964年に刊行された『猶予された者たち』の決定稿には，名前の数字が特別に小さい者，すなわち寿命が短い者が三人登場する。一人目が「友人」の妹で，三十年前に亡くなったとされる「一二」，二人目が「五〇」に向かって石を投げつけ，悪びれもしない「一〇」，三人目が，七歳で亡くなった「七」である。「友人」の妹「十二」は，三十年前に亡くなったにも関わらず，「友人」は今なお深い悲しみに暮れている。それとは対照的に，亡くなった「七」の母親は，わが子「七」の死を悲しんではいない。生まれた時から「七」が七歳で死ぬことが分かっていたので，悲しむことはなかったというのだ。「一〇」は学校に通って勉強をしていないし，礼儀を身につけようともしていない。「五〇」に石を投げつけ，そのことを咎められても歯牙にもかけない。自分は何をしても許されるのだ，と「五〇」に言い放つ。十歳で死ぬと分かっているから，何を覚えても無駄だという「一〇」自身の，あるいは「一〇」の周りの人間の無気力が読み取れる。このように，寿命が特別短いという共通点を持った三人や，その周りの人間は，それぞれ異なる態度を見せていることが分かる。

さて，今回調査した五つの草稿を見ると，初稿から第三稿において，先述の三人の人物たちの名前が全員「一二」であることが分かった。第四稿では決定稿の「七」にあたる，幼くして亡くなった子どもの場面は描かれておらず，第五稿ではこの場面は描かれているものの，子どもの名前が不明である。また，第五稿においては，「友人」の妹が登場しない。以上の内容を下の表にまとめて示す。

	「友人」の妹の名前	「五〇」に石を投げつけた少年の名前	幼くして亡くなった子どもの名前
初稿	一二	一二	一二
第二稿	一二	一二	一二
第三稿	一二	一二	一二
第四稿	一二	一二	?
第五稿	?	一二	?
決定稿	一二	一〇	七

幼くして亡くなった，あるいは亡くなることとなるこの三人の子どもたちは，少なくとも第三稿までは，「一二」という同じ名前を持っていた。カネッティはなぜ，三人の名前を統一したのだろうか。同じ名前を持つ三人，換言すると，同じ年で幼くして亡くなると分かっている三人でも，本人や周りの人間の在り方は多様であると示すためだったのではないだろうか。

5．おわりに

今回のフィールドワークでは，KAG. ヴェスターブルク劇場における『猶予された者たち』の観劇とベー

ベル・ヴィエナ＝ガルン監督への聞き取り調査，およびチューリヒ中央図書館での文献調査を行った。前者については，比較的スムーズに調査を行うことできたが，後者に関しては，調査が難航した。

まず観劇と聞き取り調査を通して学んだことを述べると，それは『猶予された者たち』の社会における「瞬間」の制度と「暴力」の関係である。報告者はこれまで，「瞬間」の制度を人間の生を抑圧するネガティブなものとしてのみ捉えていた。しかし，今回の観劇で革命後の暴力をよりはっきりと認識することによって，革命前の社会では「瞬間」の制度によって，暴力が抑止されていたことに気づかされた。「瞬間」の制度は人間の生を抑圧するものである一方，「暴力」を廃止し社会の秩序を保つ働きがあることを心に留め，今後の研究に取り組みたい。

チューリッヒ中央図書館での文献調査は，なかなか思うように進まなかった。手書きの草稿を読んだのは初めての経験だったが，筆記体の文字を読むのは想像していたよりもはるかに困難だった。カネッティがゆっくり書いたと思われる個所については読めたが，急いで書きつけた様なメモ書きに関しては，ほとんど判読できなかった。あきらかに報告者の準備不足が祟ったと反省した。例えば，もしも調査前に，カネッティの書く筆記体の文と活字になった同じ文とを比較して一文字一文字を照合し，カネッティの筆記体がアルファベットの何に該当するか一覧表にしておけば，今回の文献調査はもっとうまく行ったのではないかと思う。次回，文献調査を行う際には，今挙げたような点に注意し，十分な準備をしてから，調査に臨みたい。

しかし，難航した調査においても収穫が得られたことは，嬉しかった。特に，『猶予されたものたち』に登場する，幼くして亡くなった，あるいは亡くなることとなる三人の子どもたちの名前が，少なくとも第三稿までは皆「一二」だったことは，大きな発見であった。これまでの研究では彼ら三人を比較検討したことがなかったが，今後はこの三人を比較し，なぜ寿命が短い者の中でも本人や周りの人間の生の在り方に差が出るのか考察したい。

謝辞

本調査にあたり，多くの方々にお世話になりました。ベーベル・ヴィエナ＝ガルン（Bärbel Vienna-Garn）監督には，『猶予された者たち』の作品解釈において有益なご教示をいただきました。カネッティの草稿管理者のアネット・リュッテケン（Anett Lütteken）氏をはじめとするチューリッヒ中央図書館の皆さまには，資料の閲覧にあたって，ご協力とご配慮を賜りました。故エリアス・カネッティ氏のご息女ヨハンナ・カネッティ（Johanna Canetti）氏には，格別のご理解をいただき，本来2024年まで閲覧不可とされている資料の閲覧を許可していただきました。末筆ながら心より御礼申し上げます。

注

1）エリアス・カネッティ『断ち切られた未来―評論と対話―』（岩田行一訳，法政大学出版局，1974年初版，1981年 2 刷）150頁。

2）Fleming, Paul: Dead Men Walking zu Canettis Drama Die Befristeten. In: Susanne Lüdemann (Hg.): *Der Überlebende und sein Doppel*, *Kulturwissenschaftliche Analzsen zum Werk Elias Canetti*, Freiburg (Rombach Verlag) 2008, S. 127–143. S. 136.

3）Canetti, Elias: Die Befristeten. In Ders.: *Dramen*, München (Carl Hanser Verlag) 1964. S. 248.［邦訳，327頁］。

4）『群衆と権力』の「生き残る者」という章（S. 267–329，邦訳は上巻331–411頁）では，「生き残ること」という概念が説明されている。カネッティによると，生き残る瞬間は権力の瞬間である。例えば，戦場において他人の死を眺めるとき，人は恐怖するが，その恐怖はやがて「死んだのは自分以外の誰かだ」という満足に変わる。このように他人の死の体験を積み重ねるうちに，人は自分が不死になっていくかのような思いにとらわれ，もっと生き残りたいと思うようになる。生き残りたいと強く願う者は，そのうち人を殺すことによって他人の死の経験を積み重ね，自らは生き残ろうとするようになる。そして，自分が生き残る唯一の者になろうと欲する。生き残りたいという欲望が権力者を作り出すのである。

5）『群衆と権力』執筆期から晩年にいたるまでのカネッティの「生き残ること」という思索の変遷については，須藤温子「カネッティの死生学―生きる罪と死への抗い―」（日本独文学会研究叢書059号「『群衆と権力』の射程―エリアス・カネッティ再読―」2009年，19–33頁）に詳しい。

参考文献

一次文献

Canetti, Elias: *Dramen*, München (Carl Hanser Verlag) 1964.（邦訳，『猶予された者たち』池内紀／小島康男訳，法政大学出版局，1975年）。

――,: *Masse und Macht*. In Ders.: *Taschenbuchkassette in 14 Bänden*. Bd. 9. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1995.（邦訳，『群衆と権力㈠』岩田行一訳，法政大学出版局，1971年。『群衆と権力㈡』岩田行一訳，法政大学出版局，1971年）。

エリアス・カネッティ『断ち切られた未来―評論と対話―』（岩田行一訳，法政大学出版局，1974年）。

Canetti, Elias: Der Beruf des Dichters. In Ders.: *Das Gewissen der Worte*, München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1976, S. 257–267.

――,: Macht und Überleben. In Ders.: *Das Gewissen der Worte*, München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1976, S. 23–38.

――,: *Aufzeichnungen 1942–1985*. *Die Provinz des Menschen*. *Das Geheimherz der Uhr*, München Wien (Carl Hanser Verlag) 1972, 1987, 1993.

二次文献

Fetscher, Irnig: Elias Canetti als Satiriker. In: *Hüter der Verwandlung*. *Beiträge zum Werk von Elias Canetti*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1988, S. 217–231.

Fleming, Paul: Dead Men Walking zu Canettis Drama Die Befristeten. In: Susanne Lüdemann (Hg.): *Der Überlebende und sein Doppel*,

Kulturwissenschaftliche Analysen zum Werk Elias Canetti, Freiburg (Rombach Verlag) 2008, S. 127–143.

Göbel, Helmt: *Elias Canetti*. Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 2005.

Meidl, Eva M.: *Soziale Kritik im Werk Elias Canettis (1929–1952). Studien zum Begriff des „Verwandlungsverbotes“*. Frankfurt am Main (Peter Lang) 1994.

Pattillo-Hess, John: Tod und Verwandlung. Einige einführende Worte. In: John Pattillo-Hess (Hg.): *Tod und Verwandlung in Canettis Masse und Macht*. Wien (Löcker Verlag) 1990, S. 7–11.

日本独文学会研究叢書059号「『群衆と権力』の射程―エリアス・カネッティ再読―」2009年。

ユセフ・イシャグプール『エリアス・カネッティ　変身と同一』（川俣晃自訳，法政大学出版局，1996年）。

今回の調査で閲覧させていただいた草稿の主なもの

Nachl. E. Canetti 21.a (Schachtel 1) Thamatisierte Aufzeichnungen –Aufzeichnungen Tod.

34.2.1 Konvolut (o.D) mit Entwürfen zu „Die Befristeten“.

34.4.1 Konvolut (Einträge vom 29.3 1951–8.10.1951) mit Entwürfen zu „Die Befristeten“ angeschrieben mit: „Die Befristeten I“.

Konvolut (Einträge vom 30.10.1951–28.1.1952) mit Entwürfen zu „Die Befristeten“ angeschrieben mit: „Die Befristeten II“.

34.6.1 Konvolut (Einträge vom 22.11.1951–31.3.1952) Die Befristeten III.

34.7.1 Konvolut (Einträge vom 25.6.1952–26.11.1952) mit Entwürfen zu „Die Befristeten“ angeschrieben mit: „Die Befristeten IV“.

34.8.1 Konvolut (Einträge vom Februar 1953) mit Entwürfen zu „Die Befristeten“ angeschrieben mit: „Die Befristeten Februar 1953 V“.

＊劇場の外観と内部の様子，および劇「猶予された者たち」の写真は，KUFA のホームページから転用させていただいた。以下にその画像 URL を記す。その他の写真は報告者の撮影による。

劇場の外観と内部

http://www.kufa-koblenz.de/uploads/pics/kufa-aussen-ganz.jpg

http://www.kufa-koblenz.de/uploads/RTEmagicC_kufatheater_01.jpg.jpg

劇『猶予された者たち』

http://www.kufa-koblenz.de/typo3temp/pics/c30d997deb.jpg

http://www.kufa-koblenz.de/uploads/RTEmagicC_Pressebild_Die-Befristeten.JPG.jpg